琉球大学学術リポジトリ

平敷屋朝敏の擬古文物語群に関する基礎的研究―近世琉球に現れたヤマトの古典文学―

メタデータ	言語:
	出版者: 萩野敦子
	公開日: 2009-08-12
	キーワード (Ja): 琉球文学, 王朝文学の享受と展開, 平敷屋朝敏, 擬古文物語, 翻刻, 注釈, 教材化, 「苔の衣」, 物語文学の世界観, 「若草物語」, 琉球文, 擬古
	キーワード (En):
	作成者: 萩野, 敦子, Hagino, Atsuko
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/11770

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月２８日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５２０１２１
研究課題名（和文）平敷屋朝敏の擬古文物語群に関する基礎的研究
—近世琉球に現れたヤマトの古典文学—
研究課題名（英文）Fundamental study on pseudoclassicism novels by Hesikiya Chobin
—Japanese classics literature that appeared in Ryukyu—

研究代表者
萩野　敦子（HAGINO ATSUKO）
国立大学法人 琉球大学・教育学部・准教授
研究者番号：90343376

研究成果の概要：近世琉球において物語・和歌・琉歌・組踊台本などの作品を遺した文人・平敷屋朝敏（1700～1734）の擬古文物語四編（『若草物語』『苔の下』『貧家記』『萬歳』）について、写本の翻刻、先行研究を踏まえた注釈作業、大学での授業実践を行い、その成果を冊子体の報告書『〈研究報告〉平敷屋朝敏の擬古文物語群に関する基礎的研究—近世琉球に現れたヤマトの古典文学—』にまとめた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,200,000	0	1,200,000
２００７年度	600,000	180,000	780,000
２００８年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	570,000	3,670,000

研究分野：　王朝物語文学
科研費の分科・細目：　文学・日本文学
キーワード：　①琉球文学　②王朝文学の享受と展開　③平敷屋朝敏　④擬古文物語　⑤翻刻　⑥注釈　⑦教材化

１．研究開始当初の背景

(1)　平敷屋朝敏については、処刑による夭折の原因となった罪状すら必ずしも明らかではないなど著名な割に生涯には謎が多いが、末期の悲劇性への興味もあって、ウチナーンチュ（沖縄県人）によるオマージュ的な伝記研究は少なからずある。しかしそこに研究としての客観性が保たれているかどうかの評価は慎重になされねばならない。

(2)　朝敏が遺した四編の物語作品（擬古文物語）に対しては、玉栄清良（『殉教の文学　平敷屋朝敏の小説』1984年）と仲原裕（『平敷屋朝敏作品集』1994年）による訳注・口語訳の紹介および幾つかの研究論文を除き、必ずしも充実しているとはいえない。地元（沖縄）には、朝敏の琉歌や物語を愛唱・愛好する文学好きは多いが、我が沖縄の歴史に残る悲劇的な才人として親しむがゆえに、彼が遺した愛すべき作品を「研究」のために対象化すな

わち相対化することに対する、生理的な忌避すら存在するように思われた。

(3)　いわゆるヤマトンチュ（非沖縄県人）である申請者にそのような忌避感情がないことはもちろんであるが、何より、これまで平安王朝文学を中心に研究してきた者として、朝敏の擬古文物語群がそこから受けた影響に大いに関心をいだき、その作品世界を学術的に解明したいと考えた。

２．研究の目的

(1)　本研究で主として取り上げるのは朝敏の擬古文物語群であるが、上述のとおりまだまだ研究を進める余地がある。とりわけ、朝敏作品が発する文学性をまちがいなく支えたであろうヤマトの文学との繋がりを学術的に考究することが、朝敏を正当に評価するために必要不可欠である。

(2)　『貧家記』を例にとると、その粗筋は、事情あって官位を失い貧困を余儀なくされた主人公が、都である首里を離れ、田舎に侘び住まいをしながら、かつての都での日々を思い返しつつ田舎の景物を見ては歌を詠み、都の友人たちとの贈答に心慰められながらも切ない思いをいだき、やがて官位に復して都に戻っていく、というものである。この粗筋だけでも、『伊勢物語』のいわゆる東下りや『源氏物語』の須磨・明石退居のエピソードからの影響は明白である。構想・枠組ばかりでなく、朝敏の物語が王朝文学から受けた影響は、登場人物の造型や文章表現、語彙など多岐にわたる。下手をすれば剽窃や二番煎じといった厳しい評価にさらされる恐れもあるかもしれないが、まずは朝敏の文学を成り立たしめたものを学術的・研究的に捉え直していきたい。

(3)　同時に、恐らくは沖縄県内の研究者・研究家・愛好家を除いてはあまり知られていないであろう彼の物語作品を、少しでも国文学研究者の目に触れる場に引き出していきたい。ちなみに、上記の玉栄著書・仲原著書ともに「ヤマト＝日本の」国文学研究の最大の拠点というべき大学共同利用機関法人・人間文化研究機構「国文学研究資料館」に所蔵されていない。朝敏は「琉球・沖縄の文学」の歴史を語るときに登場する最も有名な文人の一人だが、要するに現在のところ彼が「国文学」の歴史の中に位置づけられているとは思えないのである。しかし、王朝文学から学び、その薫香を濃く漂わせる彼の文学は、まちがいなく「国文学」の歴史のどこかに定位されてしかるべきであり、それが朝敏を真に評価することにも繋がるはずだ。

３．研究の方法

(1)　まずは朝敏の擬古文物語の基礎的な資料を整える必要がある。数種類の写本の存在がわかっているので、それらを収集し、翻刻がおおやけになっていないものについては自ら翻刻作業を行う。

(2)　続いて、先行研究を確認しながら、それぞれの物語について注釈作業を行う。注釈のポイントは、物語を成り立たしめる表現や語彙が、先行するヤマトの文学からどのような影響を受けているかを確認することである。

４．研究成果

(1)　本研究の成果は、上述のように冊子『〈研究報告〉平敷屋朝敏の擬古文物語群に関する基礎的研究―近世琉球に現れたヤマトの古典文学―』にまとめた。その目次を示したうえで、以下の(2)～(5)はこの流れに従って述べていく。

はじめに
第Ⅰ編　資料編
　一　「平敷屋朝敏文集」翻刻
　二　「平敷屋朝敏遺稿」翻刻
第Ⅱ編　研究編
　一　『若草物語』本文と注釈
　二　『萬歳』本文と注釈
　三　平敷屋朝敏の擬古文『若草物語』の生成とその注釈について（再録）
第Ⅲ編　授業実践（教材化）編
　一　目論見と概要
　二　授業の実際と使用プリント
　三　授業をふりかえって
おわりに
付・参考文献

(2)　「資料編」は二種類の翻刻から成る。
①「平敷屋朝敏文集」は沖縄県立博物館所蔵の写本である。影印本が公刊されているほか、仲原裕『平敷屋朝敏作品集』はこれを底本とし、翻刻も示しているが、その翻刻がやや特殊な形式を取っていることと若干の修正が必要と思われることとにより、改めて私に翻刻した。
②「平敷屋朝敏遺稿」は旧東京教育大学・現筑波大学附属図書館所蔵の写本である。この本については全容を明らかにする形での翻

刻の紹介が未だなされていないので、同図書館の許可を得て翻刻、紹介した。

(3)　「研究編」の一と二は、「平敷屋朝敏文集」を底本とし、これを釈文化したものをテキストにして、玉栄・仲原の注釈も紹介しながら私に新たに注釈を付けていったものである。特に注意を払ったのは、王朝和歌・王朝物語からの影響についてである。例えば『若草物語』が『伊勢物語』に影響を受けていることには既に指摘があったのだが、それをつぶさに指摘し、恐らく本稿をもってその影響関係の全容が明らかになったと思われる。『萬歳』の場合には、特に『狭衣物語』との深い関係を明らかにすることができた。また、この両作品に登場する多くの「歌語」の出自については、ほぼ明らかにすることができたように思われる。

（なお、『苔の下』『貧家記』の２編については、残念ながら研究期間内に注釈を完成させることができなかった。今後作業を継続し、成果が出た時点でおおやけにしたい。）

以下に、本研究の方法を具体的に示すべく、注釈の内容の一部を紹介したい。（玉）とは玉栄注釈、（仲）とは仲原注釈、そして（私）は萩野が新しく付けた注である。これにより、読むための手引きとしての語釈の域にとどまっていた先行注釈に対し、本研究で行った注釈作業の学術的な意義を証することができると思う。

①『若草物語』より和歌「海原や漕ぎ行く舟のほのぼのと霞む波路に見え隠れして」に対する注釈

（仲）ほのぼのとかすんでいる舟路を、小舟が見えつかくれつして進んでいる海原の風景の、のどかで美しいことよ。歌の神を祭る住吉のお社を拝んでの帰途に、この美しい風景に接した作者の、ほのぼのとした明るい気持が言外に感じられる。

（私）当歌の発想の大前提として、

・ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ

（『古今集』仮名序、巻九・羈旅・四〇九・不知）

があることは言うまでもなく、これが和歌の神たる「人丸」詠と認識されていた（『古今集』仮名序、同集当該歌の左注「このうたは、ある人のいはく、柿本人麿が歌なり」、『人丸集』二一七、『古今和歌六帖』一八一八「人まろ」など）（この歌は新編国歌大観に三八件登場する）とすれば、主人公露之介の「住吉の社に詣でて歌のことなど祈りて帰りける」という行動と露之介の詠歌とは、みごとに響き合うことになる。この広く知られた歌の受容をたどっていくと、新古今歌壇において、

・あはれいかにしがのあさぎりほのぼのとうらこぐふねのあとながむらむ

（『秋篠月清集』上・秋部・一二四〇、『拾玉集』第五・五五四五）

・あかしがた島にあさ霧ほのぼのとこぎゆく舟の跡をしぞ思ふ

（『正治後度百首』康業（慈円）・一〇七六、『拾玉集』第三・三七四九）

・淡路島うらこぐ舟のほのぼのと霞にあくる奥つしら浪

（『最勝四天王院和歌』住吉浜摂津・六八・雅経）

・住吉のうら漕ぐ舟のほのぼのと霞にあくる奥つしら浪

（『最勝四天王院和歌』住吉浜摂津・六九・具親）

といった、「漕ぐ（漕がれる）」舟という要素を含む歌が詠まれるようになり、さらに宗尊親王歌壇では、

・明石潟こぎ行く舟のほのぼのと見ゆるや霧の絶間なるらん

（『東撰和歌六帖』第三・霧・三一四・三品親王＝宗尊親王）

・しまがくれこぎゆくふねのほのぼのとありとみつるもなきよなりけり

（『澄覚法親王集』無常・二八〇）

と、露之介の詠歌と第二・三句を同じくする歌が登場しており、影響関係を考えてみたいところである。

ちなみに、「ほのぼのと明石の浦の…」歌の影響下にあり「波路」の語を併せ持つ歌としては、

・ほのぼのと春の浪路にたなびくやかすみ船のつなでなるらん

（源光行『百詠和歌』・一三八）

が確認できる。

なお、仮名草子『恨の介』にも、情況は異なるが「ほのぼのと明石の浦にあらねども、見えかくれする人々のあまた見ゆるは何やらんと、」（一〇七頁）と、古今歌を意識した行文が見られる。

②『萬歳』より「音の限り吹き澄まし給ふに、この世の物の音ともおぼえずあやしうおもしろく、心寒くて、頭の毛なども立ち上がる心地するに、梁の塵翻り落ち、池の魚躍り出でて、中島の松の枝などよりはためきありく、めづらしともなかなかなり」に対する注釈

（栄）〔音の限り〕音曲のすべて。　〔中島〕庭園の池の中にこしらえた島。

（仲）〔あやしう〕よい意味で、普通でない状態を、こゝではいっている。　〔心寒くて〕寒心という漢語を形容詞にしたもののようで「心中に恐怖を覚え、ぞっとする状態」の形容。　〔梁〕棟と直角に、柱の上にのせて、屋根を支える横材。梁（はり）。

（私）『うつほ物語』や『狭衣物語』の音楽奇瑞を彷彿とさせるが、前者では、具体的に、次のような描写が登場する。

・俊蔭、せた風を賜りて、いささか掻き鳴らして、大曲一つを弾くに、おとどの上の瓦、砕けて花のごとく散る。今一つ仕うまつるに、六月中の十日のほどに、雪、衾のごとく凝りて降る。

（俊蔭・二〇頁）

・〔仲忠ガ琴ヲ〕賜はりて、何心なく掻き鳴らすに、天地揺すりて響く。（中略）仲忠、かの七人の一つてふ山の師の手、涼は、弥行が琴を、少しねたう仕うまつるに、雲の上より響き、地の下より響み、風・雲動きて、月・星騒ぐ。礫のやうなる氷降り、雷鳴り閃く。雪、衾のごと凝りて、降るすなはち消えぬ。

（吹上・下・二九二頁）

・次に、胡笳の調べにて一つ弾き給ふに、色々に、霰しばしば降り、雲たちまちに出で来、星騒ぎ、空の気色、恐ろしげにはあらで、めづらかなる雲立ち渡る。（中略）遥かに澄み上りたる声、心細くあはれにて、上は空を響かし、下は地の底を揺るがす。

（楼の上・下・九二九頁）

・ただ、初めの下れる師の教へたる調べ一つを、まづ掻き鳴らし給へるに、ありつるよりも声の響き高くまさりて、神いと騒がしく閃きて、地震のやうに、土動く。いとうたておどろおどろしかりければ、ただ、緒一筋を忍びやかに弾き給ふに、にはかに、池の水湛へて、遣水より、深さ二寸ばかり、水流れ出でぬ。

（楼の上・下・九三三頁）

このように、『うつほ物語』に見える奇瑞は多く天象にかかわり、若干地上への反響（点線部）も見られるという程度である。『狭衣物語』序盤の天稚御子降下を引き起こした狭衣の笛による奇瑞もやはり天象にかかわるが、『狭衣物語』巻三終盤で狭衣の琴が引き起こす奇瑞は、地上での反響も描かれている。

・御前なる琴を引き寄せ給ひて黄鐘調に調べて仙遊霞を弾き給へる、空に澄み昇りて世に知らずあはれに面白し。（中略）げに風にはかに荒々しう吹きて、村雨おどろおどろしう降りたる空の気色、いかなるぞと物むつかしきに、神殿の内三たびばかりいと高う鳴りて、言ひ知らずかうばしき匂ひ世の常の限りにはあらず、さとくゆり出でたるに、まことに頭の髪逆さまになる心地して物恐ろしきこと限りなし。

（下・一四三頁）

奇瑞もさることながら、そのあとの人々の「頭の髪逆さまになる心地」がしたという描写は、当場面の「頭の毛も立ち上がる心地」という表現に影響を与えているように思われる。

また、「梁の塵」という表現は、『劉向別録』に載る故事「魯人虞公、発声清越、歌動梁塵」に由来するものである。日本への文学的影響としては『梁塵秘抄』の名の由来であることのほか、初唐の詩人李嶠による「梁上繞飛塵」の句を題とする和歌が源光行によって詠まれた例がある。

・　〔詞書〕梁上繞飛塵　韓娥、斉に行く時、雍門をすぎて、乞食してうたふこゑの響うつばりをめぐること三日、梁の塵動くことやまず、雍門の人いまにいたるまでにこれをまなべり

日ごろへてこゑやゆるがずなりぬらん
のどかに見ゆるうつばりの塵

（源光行『百詠和歌』二一八）

(4)　「研究編」の三は、国文学研究資料館のプロジェクト「平安文学における場面生成研究」第９回研究会（テーマ「王朝物語と歌ことばの変奏」、2008 年 10 月 25 日、於同館）において口頭発表した原稿を整理したものである。同プロジェクト編『平成 20 年度研究報告　物語の生成と受容④』（2009 年３月発行）にも掲載されているので、再録とした。なお、同書には、研究発表の折に行われた共同討議の内容も掲載されている。

(5)　「授業実践（教材化）編」は、本研究の副産物的なものである。沖縄県出身者が圧倒的に多い教育学部の授業において、県で生まれた古典文学を読ませたいと、私に作成した『若草物語』のテキストにより、講読の授業を行った。その簡単な報告である。アンケートをもとに、学生の反応についても触れた。

(6)　2009 年 3 月末日に出来上がった研究報告冊子は、４月に入ってから学部の同僚や恩師・大学院時代の研究仲間のほか、主として中古文学会に所属している研究者の方々に配布した。まさにヤマトの王朝文学を研究しておられる方々の目にどう映るかを確かめる必要があったからである。ありがたいことに少なからず感想や批評を書状やメールで寄せていただいたが、予想どおり「沖縄にそのような作品があったことを知らなかった」という驚きの言葉から始まるものが多かった。平敷屋朝敏の擬古文物語の存在を「国文学」の研究界に知らしめることが本研究の目的の一つであったので、その足がかりにはなったかと思う。また、中古文学会における知り合いの研究者の何人かはすでに郷土の文学の紹介や研究に取り組んでおり、その方々からは「国文学の裾野を広げるために、今後は地域の文学にも取り組んでいかなければならない」とのエールをいただいた。沖縄に朝敏がいるように、全国各地に「国文学」研究が注目してこなかった文学遺産は存在する。学術的な研究を深め、それらの遺産を「国文学」の歴史に書き加えることが今後必要となろうし、本研究はその一端となりうることを確信している。

(7)　今後の課題としては、前述のとおり未完成の２編の注釈作業を進め、朝敏の物語世界における王朝文学（王朝和歌・王朝物語さらに王朝日記文学）からの影響をトータルに論ずることを目指す。また、王朝文学のみならず、中・近世の草子類からの影響についても考察していかなければならないだろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 萩野敦子、平敷屋朝敏の擬古文物語『若草物語』の生成とその注釈について、国文学研究資料館・平成 20 年度研究成果報告『物語の生成と受容④』、192～218 頁、2009 年、査読無

〔学会発表〕（計１件）

① 萩野敦子、平敷屋朝敏の擬古文物語『若草物語』の生成とその注釈について、国文学研究資料館・文学形成研究系「平安文学における場面生成研究」プロジェクト・第９回研究会、2008 年 10 月 25 日、国文学研究資料館（東京都立川市）

〔図書〕（計１件）

① 萩野敦子、私家版（印刷所：印刷屋ぺんぎん）、〈研究報告〉平敷屋朝敏の擬古文物語群に関する基礎的研究―近世琉球に現れたヤマトの古典文学―、2009 年、全 150 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

萩野　敦子（HAGINO ATSUKO）
琉球大学・教育学部・准教授
研究者番号：90343376

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし